書籍紹介

『大洪水の前に　マルクスと惑星の物質代謝』

斎藤幸平著（二〇一九年四月刊、堀之内出版　三五〇〇円＋税）

野崎佳伸

本書は著者が二七歳のとき、フンボルト大学に提出した博士論文をもとに（その英訳版は二〇一八年にドイッチャー記念賞を受賞した）その後の新たな発表論文を併載して出版された。帯にはマイケル・ハートの賛辞がある。今後の活躍に期待を寄せるべき俊英である。現在は大阪市立大学大学院経済学研究科准教授。

書名はマルクスが資本論の「労働日」項で引用した語句「大洪水よ、我が亡き後に来たれ！」に由来するが、岩波文庫第二分冊では「後は野となれ山となれ！」と意訳されているので、なじみのない読者もいるかも知れない。だから書名及び副書名にはもう一工夫あって良かったかもしれない。英語版書名は『マルクスのエコ社会主義』である。

以下では著者による「はじめに」項の記述をもとに、各章の見どころを評者なりに追記しつつ、本書の特徴と意義を確認しておきたい。

※

マルクスにはエコロジーの観点が無い、それどころか生産力至上主義であり進歩楽観主義でさえある、との評価が根強く定着している、と著者は言う。とりわけ日本ではその傾向が強いかもしれない。そもそも日本では左翼・リベラルの間で環境問題を継続的に論ずる風土が定着していない。日本では西欧のいくつかの国で見られる「緑の党」運動は、かつての反公害運動や福島原発事故を経験した後でも、広がりをみせているとは言い難い。

他方、英語圏では真逆の動きがみられるという。『マンスリー・レビュー』誌を中心に活動するバーケットやフォスターらがそれである。その鍵となる概念が「物質代謝の亀裂」であり、ナオミ・クラインも注目しているところである。

だがこれに対しても反論が出されている。「マルクスはエコロジーを経済学批判の中心に据えたことはなかった」とか「マルクスの見解は当時の自然科学の知識に制約されており、現代の課題に有効な指針を与えるものではない」という批判である。

以上を総括して著者は本書の目的を「物質代謝の亀裂論を以上のような近年の批判に対して改めて擁護すること」とする。その際、バーケットやフォスターがしたようにマルクスとエンゲルス両者の言説を恣意的に切り取って寄せ集めたかのような印象を与えかねない方法ではなく、「マルクスのエコロジーを経済学批判との明確な連続性をもつものとして、より体系的に展開」する。そのため「新ＭＥＧＡ（マルクス・エンゲルス全集）ではじめて刊行される新資料を検討することで」マルクスの環境思想の形成とその理論的射程が明らかになるという。そして「なかでも重要な資料が、ＭＥＧＡ第四部門で刊行されるマルクスの抜粋ノート、メモ書き、自家用本への書込みである」。斎藤氏は日本ＭＥＧＡ編集委員でもあるから、この仕事は打ってつけといえるだろう。なおマルクスの残した抜粋ノートは約二五〇冊あるらしく、ＭＥＧＡでは全三二巻で刊行される予定である。

著者は続ける。「マルクスの経済学批判の真の狙いは、エコロジーという視点を入れることなしには、正しく理解することができない」であろう。「このことを証明するために、とりわけマルクスの価値論と物象化論に着目し、マルクスの形態規定論にとって、素材の次元が決定的であり、資本の論理による素材的世界の変容とその矛盾をめぐる分析が資本論の中心的テーマであることを示していく」という。

そして以下、本書全七章の各意図を解説してくれる。第一章「労働の疎外から自然の疎外へ」では一八四四年の『パリ・ノート』（いわゆる「経哲草稿」を含む）において既にマルクスのエコ社会主義のモチーフが見られるという。そこでは「人間と自然の統一性の再構築」を実践的課題として一旦は掲げた。しかし『ドイツ・イデオロギー』では哲学に別れを告げ、その後は人間と自然の関係を物質代謝という生理学概念を用いて分析するようになり、さらにはその「攪乱」「亀裂」を資本主義の矛盾として扱うようになる。

この章では初期マルクスの疎外論解釈をめぐる内外の長きにわたる議論が簡単に振り返られてもいる。だがより大切なのはマルクスが当時指摘していた次の一文である。「農奴のように主人の所有物であると同時に、主人に対して敬意を払い、臣従し義務を負う立場にあるのである。それゆえに主人の彼らに対する立場は直接的に政治的であるとともに、また和気あいあいとした側面を持っている」（『経済学・哲学草稿』

岩波文庫版七七頁。訳文は本書と異なり「和気あいあいとした」は「人情的な」とされている）。なぜならば「土地と耕作者の統一性」があり「生存保証が与えられ、生産過程における自由と自律性を実現」しており「ここには資本の物象的支配の余地はない」からである。それをのちに破壊したのが本源的蓄積であった。

第二章「物質代謝論の系譜学」ではマルクスが自らの物質代謝論を深化させていった過程を『ロンドン・ノート』（一八五〇～五三年）や『経済学批判要綱』の中に追う。資本は自らが直面するあらゆる素材的制約を、技術的・科学的支配を通じて乗り越えようとする。それは一面では「資本の偉大な文明化作用」であると共に、それが価値増殖を最優先の課題として行われる限り、物質代謝の撹乱をより大規模にもたらす。「人間と自然の関係における資本主義的特殊性の把握にこそ、マルクスの物質代謝概念の独自性が見いだされる」とする。

第三章「物質代謝論としての『資本論』」ではこれまで十分に着目されてこなかった「素材的次元を経済学批判の中心テーマとして解明」される。素材の体系的役割が経済的形態との関連で正しく理解されるなら「環境破壊とは両者の亀裂から生じる矛盾にほかならない」ことが判明するだろう。

「まずマルクスは人間の側における物質代謝の撹乱を扱っている」（一四五頁）。どういうことか。労働力（＝ここでの「素材」。自然力の一つでもある）の肉体的制限や社会慣習的制限はどちらも弾力的な性質を有しているゆえ、資本はこれを利用して労働日を異常に延長しようとする。その結果、労働者の自由時間は奪われ、肉体的回復や精神的教養のための機会は失われていく。こうして際限のない資本の欲動に対する労働者たちの抵抗が生じ、労働日や児童労働の制限を要求し始める。著者は「標準労働日の制定を単なる社会民主主義的な改良主義とみなしてしまってはマルクスの変革戦略を見誤ることになるだろう」という。

他方、資本の競争は同時に「全体的に発達した個人」としての労働者の多面性をも求めるようになる。「その結果、資本主義は労働者に技能教育を与える必要に迫られる」。著者によるこの着目は、「窮乏化」への一面的理解とは無縁である。それは「構想と実行の分離」を部分的とはいえ取戻し、生産過程で失われた自律性と自由を再生するための不可欠の条件をなす、というのである。

この章ではまた、旧ソ連のルービンの「抽象的労働は素材的でも、歴史貫通的でもなく純粋に社会的なものである」という主張が、近年の「新しいマルクスの読み方」派に継承されていることが批判的に紹介される。読ませどころ満載の章である。

第四章「近代農業批判と抜粋ノート」では「自然科学についての抜粋ノートを精査することで、マルクスが若いころに抱いていた資本主義の文明化作用についての楽観的な見解を訂正するようになった過程を正確に追想できるようになる」。マルクスの転換をはっきりと記録しているのが一八六五・六六年に作成されたリービッヒ『農芸化学』からのていねいな抜粋であり、資本論でも好意的言及をしている。だが第五章「エコロジーノートと物質代謝論の新地平」では農学者カール・フラースが重要な役割を果たしたとされる。リービッヒとフラースの論争はそれ自体興味深く、今日的な問題考察にも示唆を与えるものであろう。マルクスは一八六八年にフラースを読み、エンゲルスにあてて「非常に面白い」と書いた。すなわち、フラースの結論は「耕作は、それが意識的に支配されないならば、荒廃をあとに残す」だった。フラースは耕作と森林伐採が自然的物質代謝の撹乱を引き起こし、それによる気候の変化が、古代文明国がのちに砂漠化していった原因だというのである。この章も問題が具体的なこともあり、分かりやすく記述されている。

第六章「利潤、弾力性、自然」では利潤率の傾向的低下をめぐるマルクスの議論とも関連しており、鍵となる概念が「資本の弾力性」である。「生産の自然的要素の素材的特質からの極端な乖離は生産の継続そのものを不可能にしてしまう。最終的には、資本は自然的世界の諸制約から自由になることはできないのであり、その矛盾が環境危機として現れてくるのである」。

第七章「マルクスとエンゲルスの知的関係とエコロジー」では一八六八年の理論的転換の結果、マルクスとエンゲルスの問題関心は「ずれ」をみせるようになった。この点ではひとりスターリン主義のみならず、彼らの差異の「隠蔽に加担してきた」西欧マルクス主義にも責任があるとする。

著者は「はじめに」項を次のように締めくくる。「大洪水よ、我が亡き後に来たれ！」とは、「労働者の酷使によって彼らの健康や寿命が犠牲になることについて資本がまったく顧慮を払わない」ことをマルクスが皮肉り指弾したものであった。マルクスはまた自然の「掠奪・濫用」を労働力の掠奪と同じように問題視し、物質代謝の亀裂として批判していたのである。大洪水という破局がすべてを変えてしまうのを防ごうとするなら、その取り組みは資本主義との対峙なしには実現されないことは明らかである、と。本書は我が国におけるマルクスのエコ社会主義論の、ひとつの有益な道標であり続けるだろう。

（のざき　よしのぶ）